

## 9月第2週の礼拝説教

■日 時：2022年9月11日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節 第15主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「万物は言によって」

■聖 書：ヨハネによる福音書第1章1－5節（新約p163）

■讃美歌：16「われらの主こそは」

224「われらの神 くすしき主よ」

先週の月曜日、9月5日に非常に痛ましい事件が起こりました。皆様方もニュースなどで見聞きされておられることと思います。静岡県の牧之原市の認定こども園の送迎バスの中で、3歳の女の子さんが置き去りにされ熱中症で亡くなったということです。実は、私自身が立川教会にまいります前におりました福島荒井教会には、関連施設として認定こども園がありましたので、主日礼拝の中では必ずこども園の園児や園児を送り出して下さる家庭や教職員全員のためにお祈りをしていました。また、金曜日にはまず9時から3歳未満児全員で礼拝をし、10時からは大きなホールで幼稚園児にあたる3歳以上児全員で礼拝をしていました。やはり送迎バスを3台運行しておりました。バスには運転手さんと必ず正職員の先生一人ともう一人の先生が添乗しておりましたので、お子さんたちの顔と名前が一致しないなどということにはなかつたと思います。何よりもお子さんたちの安全を第一に考えるということが幼児教育に携わる上での大前提だ、ということが教職員の方々すべてに徹底していたと思います。キリスト教主義の幼児施設として素晴らしかったと懐かしく思い出しながら、たとえキリスト教主義ではなくともお子さんたちを預かる施設という点では同じ営みをしているのに、何故、今回のような痛ましい出来事が起こってしまったのかと思うと、考えるたびに涙が止まりませんでした。その中で、本日の聖書箇所を一言一言読みました。

ところで、先週から使徒信条の文言を関連する聖書の箇所と関連付けながら、丁寧に考えております。先週は、使徒信条の原文はラテン語で「Credo（我は信ず）」という言葉で始まっており、「私はこのように信じている」ということを誰に対してでもはっきりと言い表す、という明確な意思があるということをお話しました。もう一度、そのことを繰り返しますが、「私は信じます」と言っても、それは自分の信念や確信を他の人に漠然と述べるということではなくて、長年にわたって教会が受けついでいる信仰を自分もそのよう

に受け入れているということ、主なる神様の前でも一緒に礼拝をささげている他の人々の前でもはっきりと宣言することなのです。

さて、本日は使徒信条の文言でいえば「天地の造り主」という箇所を、ヨハネによる福音書1章1節から5節を通して考えていきたいのです。実はこの聖書箇所は、私が立川教会にまいりまして最初のころの5月1日の主日礼拝で、「初めに」という題でお話ししています。その時は、イースターも過ぎて、いよいよ立川教会での歩みを始めるにあたり、どのような方向で皆様方と一緒に礼拝をささげていくかということ念頭において、私自身がいつも立ち帰る聖書箇所の一つであるヨハネによる福音書1章1節から5節を取り上げたのです。その時にも申し上げましたが、ヨハネによる福音書は旧約聖書の創世記1章1節から5節で語られている天地創造の由来を意識して書き出していると言われていいます。だからこそ、「初めに神と共にあった」「言（ことば）」によって万物が創造されていると宣言し、その言こそイエス・キリストであり、命であり、光である、というのです。

1節に「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」とあります。3回出てくる「言」については、少し先の1章14節にも「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と述べられています。この「言」は、ヨハネによる福音書の中で、あるいは聖書全体にとって、非常に大切な言葉であるとする神学者もいます。簡単に言ってしまうと、「天地を創造された」神様と共におられた「言」が、時が来て私たちの間に具体的に「肉」として宿られた、その「言」こそが私たちの信じる主イエス・キリストである、と言うのです。言い換えれば、この全世界の成り立ちの最初からおられ、歴史を支配し、今も後も世界を支配する力をお持ちになっておられる「言」である主イエスが、今この時も、私たちに親しく臨んでおられるのだ、ということになりましょう。

次に、2節で「この言は、初めに神と共にあった。」と記しています。まるで、1節を簡潔に凝縮して繰り返し述べているように思えます。大切な事柄なので繰り返し述べているというとらえ方もありますが、ある方は、「ヨハネは、初めからあった言を語ることによって、聖書の初め、創造を回顧している。」と述べています。続く3節では、「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」とあります。ここで注意したいのは「万物は言によって成った」と記されているのであり、「万物は言によって造られた」とは述べられていないのです。本日の説教題もここから「万物は言によって」といたしました。聖書の元の言葉のギリシャ語でも「成った」が用

いられており、しかも、3度も繰り返されています。「**成った**」を詳しく言い換えますと、「それらはできた」です。私たちもまた、「**万物は言によって成った**」と記される「**万物**」の一つです。そこに本当に確信をもつことができるようにと、主なる神様が私たち一人一人を強めてくださるなら、たとえ、どのようなことがあっても神様の導きに耳を済ませてそれに向かって歩み続けることができると思います。

4節では「**言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。**」と記されます。重要なのは「**言の内にある命**」は、「**人間を照らす光**」でもあるのです。そのように、今日の聖書の箇所では「**言**」と「**命**」と「**光**」が深く関連付けられて記されているのです。いずれの言葉も、ヨハネによる福音書全体を通して語られる重要な内容を持っています。

ところで、すでにこれまでもお話したことですが、聖書というのはどの書物を取りましても、世の中が平和で人々が満たされて生活し、主なる神様を信じる者は自由にそのことを告白し礼拝することができる、という状況で書かれたものとは言えません。そのことから言えば、私たちの日常にも先ほどお話したような「なぜ、このようなことが起こるのか」と思う痛ましい出来事があり、一生懸命に祈り続けていても、ウクライナをはじめとして戦争が終結する気配はありませんし、コロナウイルスの感染もこの先の見通しは立っていません。そして、ヨハネによる福音書にしても、その背景には主なる神様を信じて生きた人々の絶望やうめき、さらには、この世界や歴史の中に主なる神様などおられないのではないか、という虚無感などがあると言われています。しかし、その中でも「いや、そうではない。確かに、私たちを生かしてくださっている主なる神さまがおられる」と確信した人々がおり、その信仰を告白して記したことにより聖書として残ったのです。ヨハネによる福音書1章5節ではそのような揺れ動く状況を「**5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。**」と記していると思います。

しかし、「**言によらずに成ったものは何一つなかった。**」という3節での断定は、私たちのどのような不安や動揺をも打ち消す主なる神様からの力強いみ言葉なのです。ヨハネによる福音書の著者が意識している創世記の1章1節から5節では、神様の語られた「**光あれ。**」によって、混沌から世界は秩序をもって形になっていきます。そのことを、ヨハネによる福音書は、「**言**」としてこの全世界の成り立ちの最初からおられ、歴史を支配し、今も後も世界を支配する力をお持ちになっておられる主イエスの御業として記しました。少し先のヨハネによる福音書では、8章12節で主イエスが「**わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。**」とお語りになっています。そしてそ

の主イエスは、今まさに礼拝をささげているこの時、私たちに親しく臨んでおられます。さらに、あなたはそのことを信じているのか、と私たち一人一人に問いかけておられます。私たちは「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」と告白して礼拝をささげているのですから、「**初めに神と共にあった**」主イエスを、私たちの救い主と告白しているのだ、ということを深く覚えてまいりましょう。